研究ノート

鹿児島市の小山田太鼓踊り

松　原　武　実

鹿児島市小山田町（こやまだちょう）には現在も太鼓踊りが伝承されている。その藩政時代からの経緯については，「鹿児島城下の太鼓踊（三）小山田太鼓踊の由来」と題して『鹿児島民俗』160号（注１）に書いた。地元には多くの書類や伝承者による書き付け（メモ）等が残っている。小山田小学校創立百周年記念事業実行委員会が平成５年（1993）に編纂発行した『小山田町郷土誌』（注２）にも太鼓踊りのことが記載されている。また映像としては地元民がホーム用ビデオカメラで上演を記録したもの以外に，平成２年（1990）に鹿児島市教育委員会管理部文化課が制作した映像（注３）と，平成13年（2001）にＫＫＢが制作した番組「郷土に根付く伝統芸能」（注４）がある。これらを参考にしながら，本稿では近年の状況と現状を報告する。

1 太鼓踊り復活

小山田町は６地区から成る。かつての集落に当たるが，現在は町内会と呼ばれる。伊集院に近い西部が上（かみ），農協付近は中ノ甲（なかのこう），中央部が名越（なごし），小山田小学校以北は上原（うえばる），南の起伏部は永吉（ながよし），甲突川沿いの東端河頭（こがしら）までを下（しも）という。藩政時代の小山田村のお仮屋は名越にあり，ここが小山田の中心だったと思われる。小山田町全体は令和４年（2022）１月現在，戸数（世帯数）907戸，人口1955人である。ちなみに昭和48年（1973）は954戸，3736人であった。

太鼓踊りは第二次大戦後も時々踊ってはいたが，昭和34年（1959）から中断。昭和40年（1965）頃から復活の話が出た模様である。具体化するのは昭和42年（1967）７月，小山田農協長や小組合長（注５），青年団などが一堂に集まって相談し，諸準備が始まった。翌昭和43年（1968）８月16日に「小山田町太鼓踊り保存会」を発足させ，同年９月22日の小山田農協発足二十周年記念式（明治百年記念を兼ねる）にて復活披露することに決まった。ちなみに小山田農協は昭和23年（1948）に発足し，平成14年（2002）３月かごしま中央農協に合併してその小山田支店となった。かごしま中央農協はその後，平成30年（2018）に鹿児島みらい農協へと名称を変更している。

昭和43年（1968）９月22日，復活第１回の上演（カネ7・太鼓14）が実現する。踊った場所がどこだったかの記録が見当たらず，現在の伝承者の記憶も定かでない。この復活上演には中学生も参加した。長老たち（かつての経験者）にとってはかなりの感激だったことが当時の書類によってわかる。復活の際に指導の助手的立場をつとめた人物による，昭和43年８月の日付の入った歌詞の書き付けに次のように記されている。括弧内は私による。

昔は下方限，上方限，中方限（２組）の４組が組織され，各部落の神社に毎年旧暦６月28日太鼓

キーワード：民俗芸能，太鼓踊り

踊りを奉納してきたのであるが，各部落の神社を諏訪神社に合祀された後は従来通り，毎年旧暦６月28日に諏訪神社に太鼓踊りを奉納してきた。而し昭和35年（1960）度までで此の由緒ある虫よけ太鼓踊りは絶えていた（８年間）。本年９月22日，小山田農協創立二十周年に際し，小山田農協が郷土民芸として復興存続の決意を固められたことは誠に時宜を得た企画…

上に「昭和35年度まで」とあるのは昭和34年（1959）まで踊り，昭和35年（1960）から中断したという意味である。「各部落の神社を諏訪神社に合祀」とある「合祀」は明治の40年（1907）か43年（1910）のことである。それまでは各部落（各町内会）の神社に旧暦６月28日に奉納とあるが，旧暦７月28日とする説もあり，このあたりははっきりしない。明治以後はその年の都合によってどちらかで踊っていたのかもしれない。

この書類からは，当時の小山田農協は今のような広域農協ではなく，小山田町内住民を組合員としていたために，農協が復活の大きな力になったことが推測される。

また冒頭で紹介した『鹿児島民俗』160号掲載の私の論考では書き漏らしたのだが，小山田村内に４組の太鼓踊があったことが言い伝えられていることも重要である。藩政期，城下の諏訪祭礼にはこれらが合同してオール小山田として出場したはずだが，地元では４組が競っていたのである。

復活の翌年の昭和44年（1969）は８月17日に諏訪神社にて，11月３日には第10回鹿児島県民俗芸能発表大会（この大会は山形屋と鹿児島市東千石町の西本願寺別院の二ヶ所で開催され，小山田は後者）にて踊った。以後は毎年のように県や市の芸能祭，町民運動会，孝子碑六月灯（小山田小学校庭の一角にある孝子碑の前でおこなわれる夏祭り），その他のイベントに積極的に参加して踊っている。平成14年（2002）４月21日には東京国立代々木競技場でおこなわれた第５回「渋谷・鹿児島おはら祭」にも要請されて出演し（カネ６・太鼓12），平成16年（2004）５月15日の同じく第７回にも出演した（カネ６・太鼓８）。写真１は平成16年にNHK放送センター横のけやき並木通りにて踊るところである。

写真１　NHK放送センター横にて（2004年）。

踊り子はカネ６人，太鼓12人を基準とし，復活以後しばらくはそれを上回ることもあったが，次第に人数が減っている。最近はかろうじてカネ５人程度，太鼓は７人程度を確保している。だいたい年２回，諏訪神社の秋の例祭と夏の孝子碑六月灯（７月15日の夕方）にて踊っている。

諏訪神社例祭は春（３月15日）と秋（10月15日）におこなわれるが，踊るのは秋の例祭のみ。神社祭典は春秋とも午前10時30分より開始（神主は桜井和利氏）される。太鼓踊りは秋の祭典終了後ではなく，この前後の日曜日の朝８時より，神主のお祓いと礼拝をしてから奉納する。秋の例祭が日曜の場合も，祭典開始前の朝８時に奉納する。この場合も神主に来てもらってお祓いと礼拝をしてから奉納する。見物人はまったくいない。孝子碑六月灯は夏祭りを兼ねているので，多くの住民が見物する。

諏訪神社では復活当時から毎年の奉納が決まっていたわけではなく，時々踊るだけだったが，十数年前，新入の踊り子の確保が難しくなりつつあった平成中期以後，どうせ踊るなら神社奉納（秋の例祭）を恒例にしようということになった。ちょうど稲刈り時期なので，午前中の農作業ができるように，日曜日の早朝に踊ることになって，現在もそれが続いている。

前述したように，以上の年２回のほかにもイベントなどに出演して，なるべく何度も踊るようにしているが，踊り子の高齢化によって踊りたくても踊れない事態になりつつある。

太鼓踊り保存会（踊り子で構成）は多い時は18人ほどいたが，現在は14人ほど。実際の踊りには仕事の都合で参加できない人もおり，10人から12人程度での踊りが続いている。令和３年（2021）は最年長が78歳，60歳未満は２人のみで平均年齢は60歳代後半。若い人（といっても60歳未満だが）へ保存会加入を呼びかけているが，加入者はめったにいない。あと数年で踊りが成り立たなくなるおそれがある。

昭和49年（1974）の正月，小学生30人ほどを対象に教えることになった。公民館にて座ってカネと太鼓を叩く練習から始まり，成果披露として運動会や孝子碑六月灯で踊った。平成５年（1993）には小山田小学校百周年記念式で６年生男子40人が踊った。

小学生が踊るのは毎年というわけではなかったが，平成16年（2004）６月より小山田校区あいご子ども会太鼓踊り保存会を発足させ，小山田小学校の協力も得て，小学校にて毎週土曜日の放課後１時間ほど，５年生と６年生が練習をすることになり，以後は小学校運動会（以前は９月，今は５月）にて踊るのが恒例となった。正式の庭踊りではなく道楽を庭踊りにアレンジしている。太鼓の背中の矢旗も子供用を作り，太鼓もカネも十分な数を揃えて小学校に保管している。６年生が卒業すると新６年生が新５年生に教えるという形である。現在も続いている。以前は本番が近づくと，伝承者のだれかが指導に行っていたが，ここ数年は伝承者が指導しなくても踊りが継続されている。小学生の数も減る一方で，近年は５・６年生合わせて20人程度である。

2 楽器編成と衣装

太鼓踊りは大太鼓とカネで編成される。本番時はこれ以外に必ず先頭に一人幟旗を立てて抱える者がいる。いずれの服装も戦前，そして戦後の復活を経て少しずつ変化しているようだが，ここ10数年はだいたい次のようになっている。左・右という場合は踊り子の立場からの方向である。

幟旗　高い竿に幟旗を付ける。白字の布に黒で「小山田町太鼓踊り保存会」と染めている。行進の時は先頭に立ち，入場時は一人がこれを持って先導する。服装は普段着（だいたい黒のズボンと白シャツ）の上から，襟に「太鼓踊り保存会」と書いた法被を羽織る。踊りの間は持ったまま脇に立つ。

カネ　皿形でフチのついたいわゆる真鍮色のスリガネ型である。足は付いていない。小山田コミュニティセンターにいくつか保管してあるが，個人として所有している場合もある。全部が同じ寸法ではないが，ほぼ似たような大きさ。標準は皿の底（外側）の直径がだいたい23cmほど。けっこう重い。耳が２ヶ所付き，片方に太い提紐を付けているが，演舞の時に提げることはない。新しいものは伊集院の宮丸太鼓店で調達した。踊りでは最低４丁（４人）は必要で，４人いないと踊りができないとされる。現状はだいたい６人程度を確保しているが，毎回６人が出場するわけではな

写真2　カネ（2000年）。

い。左手の掌（てのひら）と肘までの間（内側）に伏せ，指先で支える（写真２参照）。この持ち方に名称はないが，他地区でいうところのウケガネである。この形のまま保持し，腕を高く上げたり下げたりして皿の外側を打つ。バチはＴ字型（スギを使用，カシなどの堅い木ではカネが割れることがある）で，右手に持って打つ。一番ガネ（一人）と二番ガネ（一人）の区別がある。２列に並んだ場合の右の先頭が一番ガネ，左の先頭が二番ガネである。二番ガネはイレガネともいう。だいたい一番ガネに合わせて全員で打つが，時々二番ガネ（一人）とそれ以外の全員とで応答する打ち方がある。よく鳴るカネを二番ガネにするという。もっとも古いのは個人所有で，弘化３年（1846）の文字がはいっている（これは使用しない）。カネは歌も担当する（復活後は歌わない）が，カネ全員で歌う部分とイレガネ（二番ガネ）が歌う部分があった。

カネの衣装　衣装は白襦袢の上に短裾の黒または紺系の着物。両胸と両袖に「丸に十の字」の紋が入っている。昔から同じかどうかは不明。黒っぽい兵児帯を締め，後ろに替バチと榊枝を差す。一番ガネはこれに白い御幣を，その他は七夕紙で作ったカラフルな御幣を付けるのが決まり。黒脚絆に黒足袋にワラジを履くことになっているが，ワラジの調達がしにくくなっているために黒足袋のまま，または黒地下足袋を履いたりする。頭には白鉢巻を後ろで結び，背中に長く垂らす。

太鼓　小太鼓はないので大小を区別する必要はなく，ただ太鼓という。藩政期にも小太鼓がなかったかどうかは不明。大きさは他地区とほぼ同様。12丁（12人）は必要とされるが，最近は５人～８人ほど。県内の太鼓踊りと同じく桶胴に皮を張った締太鼓である。新しいものはカネと同じく宮丸太鼓店で調達。皮の直径は40cm ほどで，胸の高さに抱く。両手に細い長バチ（40cm ほど，握ると30cm ほど）を持つ。バチの材料はムベで，以前に作ったものがたくさん残っている。全体が２列縦隊で進む道楽の時は太鼓（４人）・カネ・太鼓の順に並び，太鼓の先頭を打切（うちきり）という。会場の入口では全体が４列に並ぶ。内２列がカネ，外２列が太鼓となるが，太鼓が多い時はカネの後ろにも並ぶ。左右の先頭にベテランを配置する。カシタデコなどという言い方はしない。位置によって呼び方があったかもしれないが，呼称は伝わっていない。

太鼓の衣装　裾の短い白い上衣に白の帯を締め，頭は前結びの白の角出し鉢巻。足は黒脚絆に白足袋。本来はアシナカまたはワラジを履く。アシナカもワラジも地元に作る人がかつてはいたが，今はおらず，特にアシナカは入手できないので，今はワラジか白足袋のまま。地元以外での芸能祭や前述した東京のおはら祭出演などの場合は，太鼓の背中に「丸に十の字」を書いた布を付ける。

太鼓の背負物　まず３本の筒の付いたカレコを背中に当て，腹部にまわした黒紐で縛りつけ，次に腹に抱える太鼓から白い太紐を出して背中のカレコをさらに×状に縛って固定する（写真３）。

筒の上部に横棒（カラフルな小紙房飾りを付ける）を渡し，両側の筒に黒いホロ（毛バタキで代用）を挿す。中央の筒には高い竹竿を差す。長さ３ｍほどだが，背負うと頂点は地上から４ｍほどの高さになる。中心の竹竿の中程にワッカをはめ，多くの小色紙片を付けてカラフルに飾った細竹ヒゴ12本をこのワッカに差す（写真４）。ワッカより下部は赤い布に包まれている。中央のテッペンには見逃すぐらいに小さな日の丸旗が付けられている。全体は上に向かってラッパ状に少し開き，動くとキラキラと揺れて美しい。矢旗とはいうが旗（幡）ではない。カレコを背負ったまま，矢旗とホロは取り外すことができる。

写真３　カレコを背負う（2021 年10 月）。

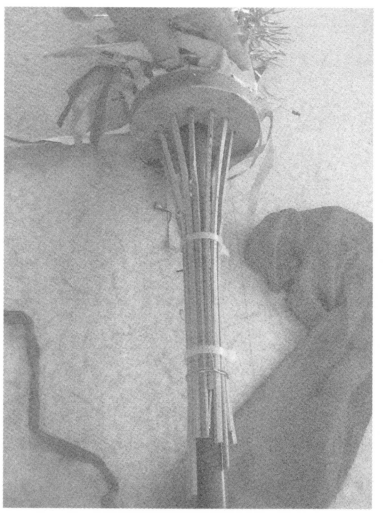

写真４　矢旗の中ほどにワッカを取り付けて細竹ヒゴを挿す。

３ 踊りの構成

太鼓踊りは道楽（みちがく）と庭踊りからなる。道楽は名前の通り移動する場合の奏楽で，２列縦隊を組む。太鼓・カネ・太鼓の順に並ぶが，太鼓は前に４人，それ以外はカネの後ろに付く。太鼓はステップしつつ叩き，カネは左右に体を動かしつつ叩く。『小山田町郷土誌』は道楽は一番道から九番道まで９種類あるとする。正式に道楽をする時は，まず打立（うったて）をし，続いて各道をそれぞれ２回ずつ順番に打ち，時間に余裕がある場合は一番道からこれをくりかえす。踊り場へ入場する時は七番道を打つ。現在は移動することがないので，道楽もない。七番道から九番道までは庭踊りの中に組み込まれている。

道楽の構成

打立
一番道から九番道まで各２回ずつ
一番道から九番道まで各２回ずつ
七番道（会場への入場）

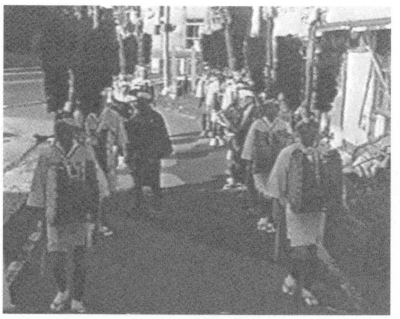

写真５　道楽風景（1991 年の KKB 制作の映像より）。最近は道楽はしないので，これが残された道楽の唯一の映像である。

踊り庭（会場）入口に到着すると４列（外２列が太鼓，カネ２列が内）に整列し，七番道にて入場する。太鼓が多い場合はカネの後ろにも付く。というよりそれが本来の形であり，現在は太鼓が少ないのでカネの後ろに付かないだけである。会場中央に出たところで，４列のまま打立（うったて）が始まる。ここからが庭踊りである。

庭踊りは短いパート（以下に述べる）の組み合わせでできている。中心部分は６種類（一番庭から六番庭まで）あったが，現在は三番庭だけを演じ，入場から退場（引庭）まで13分ほどである。東京の渋谷・鹿児島おはら祭りに出演した時は一番庭と三番庭を踊った。イベントなどに出演の際は13分程度で収めることが主催者から要望されるが，そのためだけではなく，踊り子の高齢化によりこの程度の時間が限界でもある。平成27年（2015）の諏訪神社奉納の構成と時間（分と秒で示す）を示すと次のようになる。

庭踊りの構成（平成27年（2015）の諏訪神社奉納）

1	七番道	1:00
2	打立（うったて）	0:30
3	八番道（２回）	1:18
4	九番道（２回）	1:03
5	庭入り	0:27
6	引廻し	0:32
7	百打（ひゃくべ）	0:55
8	三番庭	1:43
9	庭くやし	1:01
10	引庭（ひきにわ）	0:30
11	七番道	0:48

写真６　４列になって七番道にて入場。太鼓は向かって右の画面外にもう一人いる（2015 年）。

４列になって七番道を打ちながら庭中央へ進み，打立のあと八番道・九番道を打ちつつ輪を描き，庭入り・引廻し・百打をしてから三番庭を打ち，そのあと庭くやしにて隊形をもとの４列に戻して引庭（退場するわけではない）となり，最後に七番道で退場する。全部で11の部分から構成されている。

百打は「ひゃくべ」と呼ぶ。「百打」は当て字であろう。カネの打数が多いのでそう呼んだと思われるが，正確に百回打つわけではない。「べ」はバチまたはリズムのことである。

11の部分のそれぞれの最後には打切（ウチキリ）が付く。打切には独特の動きとカネ・太鼓全員による奏打があり，それを共通項としながらバリエーションがある。見ていてもすぐわかる。

10番目の引庭は退場ではなく，庭の中央で４列で前方を向いて打つ。そのあと七番道で２列になって退場する。つまり１（入場）と11（退場）に七番道が当てられ，２打立から10引庭までが庭踊りであり，そこでは８の三番庭を中心とし，６と７は８を準備するためと見ることができる。

ただし上では８を三番庭と書いたが，実はこれは「まくり」である可能性もある。地元作成の奏打譜（○や×でリズムを示す奏法譜）には「三番庭」と記されたあと括弧内に「まくり」と書かれているからである。事情を地元の方々に聞いても判然としない。８は11の部分の中でももっとも長いので，前半が「まくり」で後半が「三番庭」である可能性がある。このあたりはもはやわからない。ここでは８全体を三番庭と見なした。

時間に余裕がある場合は，８三番庭の中の繰り返し部分をさらに繰り返すことで調整する（時間を縮める場合はくり返さない）。前述の平成27年（2015）の上演では１から11まで13分ほどかかっているが，表示した時間を合計しても10分少々にしかならないのは，各部分のつなぎの間にインターバルがあるからである。５・６・７・８などは高齢者にとっては連続して踊るのはかなりの負担である。

右の構成表のなかでは，６引廻しから９庭くやしまでが庭踊りの中核である。その中で現在は三番庭しか伝承していないが，六つの庭すべてを踊っていた時は，連続ではなく，庭くやしのあと引廻しに戻り，百打またはまくりをして次の庭を踊った。「引廻し→百打→一番庭→庭くやし→引廻し→まくり→二番庭→庭くやし→引廻し…」という具合に，奇数庭と偶数庭で百打とまくりを交代させたのである。図示すると次のようになる。

引廻し→百打→一番庭（または三番庭・五番庭）→庭くやし
引廻し→まくり→二番庭（または四番庭・六番庭）→庭くやし

百打のあと一番庭をし，いったん庭くやしをし，引廻しに戻り，まくりのあと二番庭，という具合である。百打は奇数庭を準備し，まくりは偶数庭を準備するという形である。引廻しから庭くやしまでをひとつのサイクルとし，６種類の庭ごとにこれをくり返して踊ったわけである。これが正式のやり方だったというから，60分ほどもかかったと思われる。途中で踊り子の交代もあっただろうし，庭くやしのあと再度引廻しに戻る場合には小休止を入れ，水分補給もしただろうし，焼酎も飲んだであろう。途中でお花の披露もあったはずである。

当然場所によってはいずれかの部分の省略もあり，時間を見ながら何番庭を踊るかはリーダーが決めたのであろう。会場に入場するまでの道中では，道楽が見物人の期待を盛り上げた。踊る側は

もちろん，見る側にも相当のエネルギーが必要である。４地区が次々に道楽を打ちながら通っていった時代の興奮が目に見えるようだ。オール小山田で城下諏訪祭礼に出演した時は，城下の人々による他地区との比較の目があるから，なおさら盛り上がったであろう。そういう興奮の余韻は城下の諏訪祭礼がなくなったあとも地元で続き，地元の神社が今の諏訪神社に合祀される明治40年（1907）頃までは続いたと思われる。

４ 踊り方

平成27年（2015）の上演が近年の踊り方の標準になっているが，この形は東京での「渋谷・鹿児島おはら祭」出演でほぼ確定したものである。上に述べた各部分の踊り方について簡単に説明する。この時の構成はカネ７・太鼓８。踊りというより，カネ・太鼓ともに奏打に合わせてステップを踏み，体を前後左右に動かすのが基本動作である。太鼓はほとんど常に上方向に動き，小さく飛びあがる。カネは前傾してからカネを持つ手を頭の高さに挙げるという大きな動きがしばしばある。以下，だいたいのところを記して想像の手助けとする。左右という場合は，踊り子の立場からの方向である。

１ 七番道　会場入口に４列縦隊で整列。太鼓は外側２列，カネは内側２列。太鼓右列先頭が全体を見渡して確認し，左手で太鼓をドンと打つ。これを合図にカネが一斉に打ち始める。以下すべての部分は太鼓の一打で始まるが，ほとんどは前の部分の最後に続いて打たれるので，見物者にとっては最初にカネが打たれているように見える。カネも太鼓も片足でステップを踏みつつ少しずつ前進。二番ガネとその他のカネとの掛け合いもある。中央に出たところでカネ全員は大きく左足を前に出して前傾し，カネを持った左手を地面近くにまで下げ，次に頭の高さに掲げる。この動作が打切開始を告げる。左手にカネを高く挙げたまま右手でこれを叩く。次第に早くなる打ち方（いわゆる流し打ち）である。太鼓がその場でステップを踏みつつ呼応し，全員で一斉強打。一同礼の号令に合わせてその場で拝礼。

２ 打立（うったて）　４列がセンターラインを中心に２列ずつ左右対称に向き合う。最右列と最左列の太鼓どうしは向き合う形だが，内側のカネはやや斜め前（右列は左斜め前，左列は右斜め前）を向く。この形でカネは打切と同様に左足を前方に出して前傾してカネを下げ，続いて頭の高さにまで持ち挙げて叩く。太鼓が呼応し，後半は全員の一斉奏打。そして打切。

３ 八番道　４列は前方を向いたまま，その場で全員ステップを踏みつつ奏打を始める。カネは半歩前進・半歩後退をくり返す。二番ガネとカネ全員との掛け合い，カネと太鼓との掛け合いあり。同じことを２回くり返して打切。

４ 九番道　４列のまま移動せず。八番道と同じような奏打。同じことを２回くり返して打切。

５ 庭入り　４列のまま移動せず。八番道・九番道と似ている。終わると打切。

６ 引廻し　カネは左廻りに，太鼓は右廻りにそれぞれ１列となる。カネは一番ガネが左に進むとそのあとに二番ガネがはいり，以下右列と左列が交互に前後して列をなし輪を作る。太鼓は右列先頭が右手に折れて，後続の太鼓が続く。右列の最後に左列先頭が続いて列をなし，カネを内側にして前進しながら外側に輪を作る。奏打しつつ輪ができたところで，カネも太鼓も大きくステップを踏んで調子よく打ちながら円上をカネは左廻り，太鼓は右廻りに進む。最後はその場に停止し，円

の中心を向いて打切。

7 百打（ひゃくべ） カネも太鼓も円上をゆっくり動きながら，カネだけが奏打する。しばらくして二番ガネとカネ全員との掛け合いがある。そのあと太鼓が加わり，全員での調子のよい奏打。最後は打切。

8 三番庭 百打と似ている。二番ガネとカネ全員との掛け合いの合間に太鼓が打たれるのが百打との違い。そのあとのカネ・太鼓全員での奏打はテンポを少し変えながら調子がよく，何回もくり返される。最後は打切。

9 庭くやし 円上で動きながらもとの４列の隊形に戻る。「くやし」は「崩す」という意味。最後は全員正面を向いて打切。引き続いて踊る場合は引廻しに戻るが，今はこのまま引庭に移る。

10 引庭（ひきにわ） ４列で前を向いたまま奏打しつつ，六歩ほどゆっくりあとすざりし，そして前進。前進のステップは軽やか。あとすざり，そして前進，を２回くり返して打切。最後に拝礼。これで庭踊りは終了である。

11 七番道 カネは２列のまま一歩前進し，先頭に続いて左廻りに後ろに向きを変えて２列で会場出口へ進む。右列の太鼓先頭は右廻りに後ろを向いて進み，後続の太鼓がこれに従う。左列先頭は右列太鼓の最後に続いて１列となる。つまり全体はカネ２列，太鼓１列の３列となって会場入口に戻る。戻り終わると列が崩れてすべて終了。

写真７ ４列から輪の隊形になったところ（2015 年）。

5 歌詞

一番庭から六番庭までそれぞれに歌がついていたが，昭和43年（1968）の復活の際に歌は放棄された。当時の師匠の中に次に述べる六番庭を少しだけ歌える人がいたものの，継承するには至らなかった。歌詞は「けいえ踊り」を除いて『小山田町郷土誌』にも載っている。

県内どこでも共通することだが，太鼓踊りは年中行事として踊られる場合には当然ながら怨霊慰

撫・五穀豊穣・災厄回避を願うものだが，現実に干魃や害虫発生に見舞われた場合は，臨時に降雨や虫除けの祈祷としても踊られた。天保の頃城下に松枯れ病が広がったことがあった。小山田にも藩庁の命令があり，城下の吉野村の松林まで出かけて行って踊ったという伝承も残っている。それで松枯れは止まったというから，太鼓踊りの効き目は信じられていたのである。太鼓踊りがしばしば「虫除け踊り」「虫追い踊り」「虫べ踊り」などと呼ばれるのはそのためである。その場合には「サネモリ（実盛）」の歌詞が歌われた。実盛の怨霊が害虫や災厄の原因と見なされ，全国的にこの類いの歌詞がカネ・太鼓を伴奏に歌われた。それが小山田でも「虫よけ（虫べ）」として書き留められている。「虫べ」の「べ」は拍子の意味である。特別なリズムだったとは思えないが，カネ・太鼓を賑やかに鳴らすことが虫除けに効果があったとされるので，正確に踊るよりも賑やかに奏打したと思われる。

また『小山田町郷土誌』にはないが，「けいえ」という歌詞も地元では書き留められている。もっと長い歌詞だったかもしれないが，これだけが記録された。内容は「殿様誉め」である。領主の武勇を誉める歌詞は県内にはいくつもあるので，その類いだったのであろう。一番庭から六番庭までの庭踊りのあとに，アンコールのような形で追加して踊ったものか，あるいは祝賀行事などの場合に特別に，いずれかの庭踊りの歌詞と差し替えて踊ったものかもしれない。

以下歌詞を掲げる。紙幅もないので簡単にコメントすると，すべて小山田で作られたものではなく，その系譜は県内各地との比較の中で検討すべきものである。たとえば小山田太鼓踊りは加治木から習ったとする伝承があるが（これについては『鹿児島民俗』160号にて検討した），一番庭は加治木の小山田と木田でもそっくり同じであるだけでなく，宮之城町大薄（おおすき）や種子島の一部の大踊り（種子島では太鼓踊りを大踊りという）でも歌われる。二番庭の「山がら」はさらに多くの類歌が県内各地にある。これらの歌詞は九州北部や中国・畿内ともつながっている。

本県の太鼓踊りはどこからどのような経路で成立したのか。歌詞の追跡はその大きな手がかりとなるはずだが，変化が多くて簡単にはいかない。丹念に個別の太鼓踊りをレポートし，それらを比較していく地道な作業が必要である。本稿はその一助となることを願って作成した。

小山田太鼓踊りの歌詞

一番庭（若君様）

1 若君様にあげたき物は
　ゆがきに弓と的矢をそえて
　すごろく板にお尺八

2 屋島の宮に参りてみれば
　白木のなぎなた千ふりござる
　青葉の笛はかずしれず

二番庭（山がらしずめ）

1 山がらが山がらが
　山がほそいて里に出る
　里に出た山がらは住みよかろ
　里でさされて山こいし

2 住吉の住吉の
　すみに雀が巣をかけた
　巣くう雀はすみよかろ
　さこてさす雀はすみよかろ

三番庭（千本榎木）

1 これのお庭の千本えの木
　えの実はならず黄金の花が咲く
　あやとにしきのかけざをに
　これぞ殿様福えのき

2 これのお庭の七九の竹よ
　よかろ日をみて切りそめおきて
　あやとにしきのかけざおに
　これぞ殿様福えのき

四番庭（山寺）
山寺に山寺に
参りてみればやれなつかしや
きゃくでを照らすもみじかな

五番庭（えいんじょ）
もみじふみわけもみじふみわけ
かえるはもみじばのかえるほは
しらはの上をみればやれなつかしや
エーインジョエーインジョエーインジョ
エーインジョエーインジョエーインジョ
それはさてえいんじょえいんじょ

六番庭（向かえの浜）
1 向かえの浜に向かえの浜に
塩汲むじょろが
こづまにかのこ
ぬれてしおらしや
あやとにしきののかけざおに
2 やなぎこやなぎいとやなぎ
春のうぐえすほけきょうをよむ
あやとにしきのかけざおに

虫よけ（虫べ）
1 実盛殿の召したる笠は
ぬりてがよいかよ
もとのしょどくのできがよいかよ
2 異国よりさくらくう虫がいて
それはよおしもどせ
伊勢の神風
しゃべはうせて秋となる

けいえ踊り
おとの様の召したる馬は
あし毛の駒につるぐちつき毛
これぞとのの名馬かな

注1 鹿児島民俗学会編集発行『鹿児島民俗』160号，令和3年（2021）12月。
注2 小山田小学校創立百周年記念事業実行委員会編集発行『小山田町郷土誌』，平成5（1993）5月。
注3 鹿児島市教育委員会管理部文化課が平成2年（1990）に制作した記録映像。約27分。道具や衣装，踊り方についても解説されている。文化課は現在は文化財課になっている。
注4 KKB（鹿児島放送）が平成13年（2001）に制作し，同年3月に放送した太鼓踊りの紹介映像。約30分。いわれや踊り方について当時の伝承者からの聞き取りに基づいて編集されている。地元に保存されているコピー映像を参照した。
注5 昭和23年（1948）に小山田農協が発足した時，小山田町のかつての部落（昭和40年代から集落と呼ばれる）を小組合とした。小組合長は集落長のことである。小山田農協が平成14年（2002）にかごしま農協と合併した以後は町内会（町内会長）と呼ばれている。

（2022年1月19日）